



Title	否定的接辞による特殊な意味の形成 : CONTAINERイメージ・スキーマで見る英語の「-less」と日本語の「無-」を中心に
Author(s)	チャン, クオック ヒエップ
Citation	EX ORIENTE. 2025, 29, p. 63-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

否定的接辞による特殊な意味の形成

——CONTAINER イメージ・スキーマで見る英語の「-less」と日本語の「無-」を中心に——

チャン クオック ヒエップ

1. はじめに

英語の否定的接辞は「un-」、「in-」、「non-」が、日本語の否定的接辞は「不-」、「非-」、「未-」が代表的な例であるが、「存在性の否定」を示す接辞としては、英語の「-less」と日本語の「無-」を挙げなければならない。英語の「-less」は接尾辞であり、日本語の「無-」は接頭辞であるように、語基に対する位置は異なるが、両者は(1)のように意味が互に対応する。

- (1) a. 無色 - colorless、 無害 - harmless、 無援 - helpless、
無宿 - homeless、 無月 - moonless、 無銭 - penniless、
無力 - powerless、 無根 - reasonless、 無言 - speechless、
無味 - tasteless、 無謀 - thoughtless、 無用 - useless、
無意味 - meaningless、無価値 - worthless、 無動作 - motionless など

- b. 無限 - boundless/limitless、 無数 - countless/numberless、
無価 - priceless、 無比 - peerless、 無類 - matchless など

[渡邊他(編)『新和英大辞典第5版』、研究社、2003]

(1a) から見ると、日本語の「無-」と英語の「-less」は「存在性の否定」を

示すため、「～がない」と説明される。しかし、(1b)では、「無-」と「-less」がそれぞれ結びつく相手とともに、「甚だしい」「多い」「良い」といった意味を形成している。このように、日本語の「無-」と英語の「-less」からなる語の中には、語の意味がその構成要素の意味の単なる合計と一致しないものがある。

影山[1993]は、(1a)のような派生語が接辞と語基の本来の意味から推測できる場合、その意味は「透明」と述べ、他方、(1b)のような派生語が接辞と語基の本来の意味を足しても造語全体の意味にならない場合、その意味は「特殊化している」と見なした[影山 1993: 8]。この影山[1993]の見解に沿って、本稿では、まず「特殊な意味」を語義が「-less」や「無-」と結合する相手の総和——「ない、存在しない」——にとどまらず、意味が融合することにより新たな意味を生み出すものと定義づける。そして、なぜ「無-」と「-less」が否定辞でありながら肯定的な意味合いを持つ語を構築するのかという問いに取り組み、その意味形成プロセスと共通点・相違点を分析する。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、先行研究を考察し、形式意味論の視点から残されている課題を整理した後、認知言語学のアプローチ、特にCONTAINER イメージ・スキーマを用いた先行研究を紹介する。第3節では、英語の「-less」における特殊な意味を提示する。第4節では、「無-」における特殊な意味を提示し、「-less」との共通点と相違点を明らかにする。第5節では、「-less」と「無-」がそれぞれの意味のネットワークにおいて持ち得る特殊な意味を紹介し、CONTAINER イメージ・スキーマを導入することで、特殊な意味の形成プロセスとその理由を明らかにする。第6節では、本研究の内容をまとめる。

2. 先行研究とその問題点

2.1 形式的意味論の観点から見る先行研究

先行研究では、「無-」または「-less」を対象に、語形成の観点から追究する

研究は多く行われてきた。しかし、「無-」を「-less」に対照した研究、特にその特殊な意味に関する研究は、管見の限り、ほとんどない。しかし少ない中で、Zimmer [1964] と影山 [1999] の研究がその例として挙げられる。

Zimmer [1964] は、日本語が多くの中語由来の否定的形態素を取り入れており、これらは主に漢語の語基と組み合わせて使用されると述べている [Zimmer 1964: 74]。Takahashi [1952] はローマ字化和英辞書を分析対象として、Zimmer [1964] は「非-」「不-」「無-」の否定形態素を英語の対訳接辞について論じた。Zimmer [1964] によると、「非-」は英語の「non-、un-、anti-」に対応し、西洋起源の語の翻訳借用において生産的な手段とされている。「不-」はTakahashi [1952] の辞書に約 140 語が載っており、そのうち約 2:1 の割合で否定的意味と中立的意味が見られる。「無-」に関しては、Zimmer [1964] では日本語における「無」が中国語の「無 (wú)」と語源的に対応し、純粹に否定的な機能よりもむしろ「欠如」の意味を持つことが多いと述べている。更に Zimmer [1964] によると、「無-」は、対象となった 115 語のうち、否定的な意味と中立的な意味の割合が「不-」とは逆に 1:2 であり、肯定的な意味が多く存在する [Zimmer 1964: 75]。例えば、「無比、無双」などは peerless、matchless、unparalleled と説明され、「無罪、無害、無邪気」などで innocent、innocence と定義されている。このように、Zimmer [1964] は、「不-」は「不安、不機嫌、不慣れなど」で、プラス的な意味合いを持つ語基と結合し、否定的な基盤に対する否定接辞の使用に制限がある一方で、「無-」は中性的な意味合いを多く持ち、「否定」という枠組みから離れ、接頭辞としての機能が薄くなってきており、顕著な相違点があると指摘した。

影山 [1999] は、否定の度合いに注目し、英語の「non-」「in-」「un-」の特徴を、日本語の「非-」「不-」「無-」に照らした結果、日本語の否定接頭辞も英語と同様に形態的な親密さと意味との相関があると指摘している [影山 1999: 167]。具体的に、「非-」は音声的に独立しており、客観的な否定を示し(非会員、非生産的など)、英語の「non-」に似ている。「不-」は主観的な反対概念を表す(不利、不合理など)が、英語の「in-」や「un-」と類似している。

「無-」は名詞を形容詞的に変えるが、主観的な意味や評価が含まれることが多い（無鉄砲、無気力、無能など）が、英語の特定の接頭辞とは対応が難しい。一方で、影山 [1999] は日・英の否定辞と語の意味的な性質について議論した際、誇張表現や控え目表現が発達している英語では、意味が変貌する傾向が日本語より強いように思われ、語義がそれぞれの構成要素からの意味通り解釈より誇張的に理解される傾向があると述べている [影山 1999: 13]。例えば、numberless は「数のない」から「無数に多くの」へと発展する。このように、影山 [1999] は、英語の否定辞と日本語の否定辞が、それぞれの否定的接辞が語基に対して何らかの程度で否定の意味を付け加える点で共通していることを指摘している。しかし、「-less」の特殊な意味にのみ注目し、「無-」との類似点やその特殊な意味の形成に関する共通点を指摘することはできなかった。

2.2 認知言語学の観点から見る先行研究

英語の「-less」と日本語の「無-」による特殊な意味の形成について追究する際、これまでのように、形式意味論的観点ではなく、認知意味論的なアプローチを採用することが重要だと思われる。なぜかという、影山 [1999] が述べているように、形式意味論的な考え方は、意味の合成性 (*Compositionality*) の原則、つまり全体の意味はそれを構成する部分の意味をそのまま足し算したもの「 $1 + 1 = 2$ 」であるが、認知意味論の立場では、「 $1 + 1 = 2 + \alpha$ 」になることもあるからである。影山 [1999] によると、人間は言葉の意味を形式的に論理によって雁字搦めに捉えるのではなく、むしろ言葉というものを実世界における人間の外世界認識や様々な含蓄なども意味の一部に含めようとする [影山 1999: 22]。英語の「-less」と日本語の「無-」について、認知言語学のアプローチの一つである CONTAINER イメージ・スキーマを用いて分析した研究としては、Holmqvist & Pluciennik [1996] の「-less」および有光 [2013a] の「無-」に関する研究が代表的なものである。

CONTAINER イメージ・スキーマは、図 1 で示すように容器 (CONTAINER)、内容 (CONTENT- X で表記する) の 2 つの要素から構成され、〈内部〉と〈外

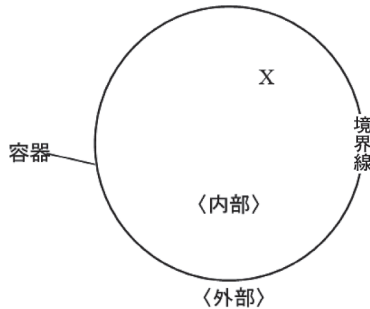


図1 CONTAINER イメージ・スキーマ [Johson 1987: 23 &他に基づいて作成する]

部〉を区別する境界線 (BOUND) から成り立っているスキーマである。IN・OUT、CENTER・PERIPHERY、FULL・EMPTY などのスキーマと関連性がある。

Holmqvist & Pluciennik [1996] は、英語の接尾辞「-less」と「-ful」を対照し、「-less」の認知構造が CONTAINER イメージ・スキーマの FULL・EMPTY スキーマの EMPTY によって形成されると指摘している。具体的には、「-less」と「-ful」で終わる語を三つのグループに分類し、詳細に分析している。第一のグループは、careful - careless、joyful - joylessなどで同じ語基に「-less」と「-ful」が付く場合である。この場合、語基は主に精神的価値や概念を表すことがある。一方、colorful - colorless、voiceful - voicelessなど、物事の性質や非精神的な意味を表す語基も存在する。これにより、「-less」と「-ful」のペアは「不十分・十分」の関係として理解され、「-less」は「足りない」と「良くない」と解釈される。第二のグループは、「-less」のみが付く語基であり、特別な部分が欠けている意味を示す。Toothless、heartless、valuelessなどでは、語基の意味内容が常に「ある」状態と比較して「ない」状況を示す。更に、語基が示す「限界、境界」が「-less」と結合することで、欠如ではなく「広大さ」や「甚だしさ」を表す boundless、limitlessなどがある。第三のグループは、「-ful」のみが付く場合であり、armful、cupfulなどで物理的な容器や体積の満ち具合

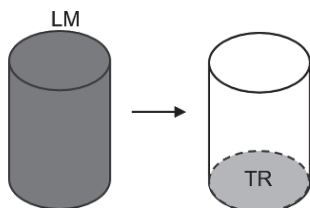


図2 FULL · EMPTY スキーマ

を示す。これらの表現は、物理的な容器に収められる量を示すだけでなく、場合によっては、その容器の「囲まれた領域」全体を指すことがあり、量の広がりや範囲の多さを暗示する。また、精神的または社会的評価を示す場合もあり、語基が「満ちている」ことが良い評価を示すこと（beautiful、delightful など）

もあれば、マイナス評価を含むこと（deceitful、disrespectful など）もある。さらに、強調を示す「-ful」は満ちる状態を強調し、境界に迫る状態を示す topful、brimful もある。このように、「-less」と「-ful」は、それぞれ異なる認知的意味を持ち、相互に対称的な関係にあることは明らかである。

以上の考察と分析を踏まえ、Holmqvist & Pluciennik [1996] は「-less」の認知モデルに関しては、図2で示すように、FULL · EMPTY スキーマを採用し、「-less」の内容（TR）が、期待される基準（LM）に達しないことや顕著な欠如を示すと主張している。このように、Holmqvist & Pluciennik [1996] は、FULL · EMPTY スキーマが「-less」の認知構造であると提示したが、それが boundless、endless、priceless などの特殊な意味の形成にどのように関与しているのかは、まだ明らかにされていない。

有光 [2013a] は「無」と「空」の違いに注目している。有光 [2013a] によれば、「空」は空間を前提にし、特定の場でのみ使用される。次の (2) と (3) で示されるように、「グラスは空である」という表現は可能でも、「冷蔵庫の中は空だ」は意味的に不自然である。なぜなら、(2) の「ワイン」は唯一の対象であるため、「ワインが入っていない」を「グラスが空である」と言い換えられるが、(3) の「ワインボトル」は文脈により唯一の対象であるかどうか判断できないため、「冷蔵庫は空である」と断言することはできない。もし冷蔵庫の中にハムや果物などの食材がある場合、「ワインボトルが無い」という状況は「冷蔵庫が空である」と言い換えられない。つまり、「空」とは異なり、「無」は存在そのものを否定し、特定の空間に依存しない。(3) では、(3c) の

「冷蔵庫の中は空である（何もない）」よりも、(3b) の「冷蔵庫の中にワインのボトルが無い」という表現のほうが適切であると言える。

- (2) a. グラスにワインが入っている。
b. グラスにワインが入っていない。
c. グラスは空である。
- (3) a. 冷蔵庫の中にワインのボトルがある。
b. 冷蔵庫の中にワインのボトルが無い。
c. 冷蔵庫の中は空だ。(??)

[有光 2013a: 164-165]

有光 [2013a] によると、「空」は本来、存在すべきものがなく、容器としての空間において予測されるものが存在しないことを意味する。一方、「無」は「有る・無い」という側面に焦点を当て、より広範な意味を持つ。具体的に、存在の有無を表す根源的な対比「ある・ない」は存在の量の多さを表す「多い・少ない」から質感、価値判断「良い・悪い」など高度に抽象的な方向の対比概念へ展開している [有光 2011:

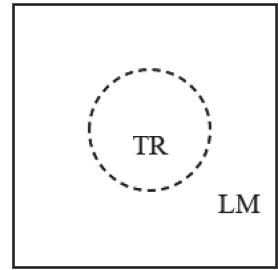


図3 「空・無」の認知構造

29-30]。しかし、「空」においては、特定の場としての空間が存在することが前提となっており、この点が「空」の使用において重要であると考えられる。そのため、「空」よりも「無」の方が接頭辞として意味的な縛りが少なく、生産性や拡張性に富んでいると考えられる [有光 2013a: 173]。

また、有光 [2013a] は、日常言語における「無」や「空」の使い方が空間的非存在や価値的否定性にとどまっているように見えるが、これらの概念は単なる「有る」「無い」の二項対立を超えた上位概念に気づく視点を必要とする」と指摘している。具体的には、「有る」と「無い」を統合して全体を構成する

視点が、より高次の「有る」であり、同時に「空」でもあると考えられる。この視点は仏教や禅の考え方とも関連しており、認知言語学の主観性や使用基盤モデルに矛盾しないものと捉えられている [有光 2013a: 169]。このように、有光 [2013a] は「有」と「無」という対立的な概念が実は一つの全体として捉えられる対象であり、空間認知的な否定を表す「無」と「空」も、それぞれを「有」と照らし合わせることで、日常生活では見過ごされがちな「有」と「無」の二項対立を超えた新しい世界観—「空」が示されることを示唆している。

このように、英語における「-less」と日本語における「無-」は、CONTAINER イメージ・スキーマによって意味と特殊な意味を形成していることが明らかになっている。しかし、図2と図3で示すように、それぞれの認知構造が異なっている「-less」と「無-」が、なぜ特殊な意味において共通するのかについては、さらに議論する必要がある。

3. 英語における「-less」とその特殊な意味

「-less」は古英語 (OE) の「-lēas」(without) に由来し、名詞の後ろに付き、その名詞の存在を否定する形容詞を作る [西川 2006: 257]。意味としては、「欠損、欠落、そして“無い”」を基本にしつつ、逆説的にその名詞に対して「無数」や「過度」の概念を持つことがある [西川 2006: 257、西川 2013: 47]。本稿は、西川 [2006, 2013] とこれまでの考察を踏まえて、「-less」の特殊な意味を、程度評価「甚だしい」、量的価値「多い」、質的価値「良い」に分けて、考察する。

3.1 程度評価「甚だしい」

英語の boundless、limitless などでは「甚だしい」という意味がある。これらの語は、「限界、境界がない」から「広大な」へ、最終的に「甚だしい」と意味が発生する。この「限界がない」は endless のような時間の概念を示す語でも確認される。

- (4) a. The boundless deserts will be the bridal couch, above us the stars will shine with a clearer radiance. —K Bergeron. 2002, *Cambridge Opera Journal* Vol. 14, No. 1/2 (果てしない砂漠が花嫁の寝台となり、私たちの上では星々がより一層輝きを増して照らすだろう。)
- b. During the gold rushes when the population suddenly increased many-fold leading to seemingly limitless demand for meat, the balance finally tipped against labour. —John Pickard (2007) *Rural History* 18, 2, 143-162 (ゴールドラッシュの際、人口が突然数倍に増加し、肉の需要が無限に近いものとなった結果、労働者に対するバランスが最終的に崩れた。)
- c. My duties require frequent speech-writing, occasional news releases, and nearly endless telephone conversations. —Duncan Morrow, 1992, *English Today*, 8, 4, 37-42 (私の職務には、頻繁なスピーチ作成、時折のニュースリリース、そしてほぼ終わりのない電話会話が含まれる。)

上の (4) では、下線部は、「果てしない」、「無限」、「終わりのない」などの意味を表し、特定の空間的または時間的「限界・境界」の存在を否定している。そのため、boundless、limitless、endless の「-less」は「広大さ」の世界を表すようになっている。

3.2 量的価値「多い」

「多い」という特殊な意味は countless、numberless、measureless など語基が数量と測定方法を表す語で確認されている。以下の例では countless、numberless、measureless が「非常に多い」を示す。

- (5) a. If you ever visit Japan, be sure to go to at least one temple-festival, —*en nichi*. The festival ought to be seen at night, when everything shows to the best advantage the glow of countless lamps and lanterns.—Lafcadio Hearn, 1899, *Insect-Musicians*, p.53 (もし日本を訪れることがあれば、

ぜひ一つは「縁日」と呼ばれるお祭りに行ってみてください。お祭りは夜に見るべきで、無数のランプや提灯の光が最も美しく映える瞬間を楽しめる。）

- b. Every fragment of obsidian or petrification was a subject of wonder, and a text for numberless thoughts. —Jonathan White, 2007, *Journal of American Studies*, 41, 2, 375-404 (全ての黒曜石の破片や化石は驚きの対象であり、無数の思考のテキストであった。)
- c. The shadow about her secretes mystery, just as the forest breeds romance: and mystery is a measureless realm. —George Meredith, 1894, *Lord Ormont and His Aminta* (彼女の周りの影が秘密を隠しているように、森がロマンスを育むように、そして秘密は計り知れない領域である。)

この countless、numberless、measureless は、日本語では「無数の」または「計り知れない」と訳されるように、明らかに「多い」という意味を持つ。英語の「-less」の特殊な意味「多い」は、抽象的な対象となるものが非常に多く、正確に数えたり計測したりすることができない状態を表す。

3.3 質的価値「良い」

量的価値ではなく、質的価値である「良い」という特殊な意味も「-less」によって形成されている。このような特殊な意味が確認される例は少なく、代表的なものとして priceless が挙げられる。この priceless の意味は、同じく金銭的な概念を表す語基を持つ worthless や valueless の「良くない」という意味と逆である。

- (6) a. Interacting with kids and seeing their faces light up is priceless. —Nathan Diller, *USA TODAY*, 13 May 2024 (子どもたちと触れ合い、子どもたちの表情が明るくなるのを見るのは、とても貴重なことである。)

- b. Without it, my pursuit - and the steadiness, patience, seclusion, regularity, hard work, and self-concentration - would be utterly worthless to me. —Alexander Welsh, 1991, *Modern Philology*, 88, 292-298 (それなしでは、私の追求、そしてそれが要求する持続性、忍耐、孤独、規則正しさ、勤勉、自己集中は、私にとって完全に無価値なものになってしまうだろう。)
- c. A person who cannot help wanting a valueless object needs either the object or to be free of his desire for it. —Yitzhak Benbaji, 2005, *The Doctrine of Sufficiency: A Defence, Utilitas*, 17 (3), 310-332 (価値のない物をどうしても欲しがる人は、その物を手に入れるか、その欲望から解放される必要がある。)

「良い」という特殊な意味に関して、英語の「-less」は「甚だしい」という意味で非常に「良い」意味を生じやすい。特に、語基が時間的な概念を表す語の場合、「永遠」や「永久」という意味にまで拡張されることがある。Timeless、dateless、agelessなどの「-less」は、単に時間が「無い」ことを示すのではなく、「時代を超えた、永遠に」という肯定的な意味を持つことで、ポジティブな評価を得ることができる。

4. 日本語における「無-」とその特殊な意味

「無-」は古代中国語から借用された漢字要素であり、基本的には「存在しない」という意味を持っている。しかし、「無-」ではじまる語、特に二字漢語には、特殊な意味を持つ語が多く確認されている [チャン 2023a, 2024]。英語の「-less」と共通する程度評価「甚だしい」、量的価値「多い」、質的価値「良い」の他に、「無-」には「足りない」の意から発生した量的価値「少ない」と「良くない」という評価も表す。

4.1 程度評価「甚だしい」

「甚だしい」という特殊な意味は、「無-」の語基が形而上学的な諸概念を表す時に顕著である。主に、空間的な概念（無限、無辺、無窮、無際限など）や、時間的な概念（無期、無期限など）を表す語で確認される。このように、「無-」がその否定を示し、後ろの語基が示す「限界・境界」を否定することによって、語義全体で「広大さ」を表現し、最終的に「甚だしい」という派生的な意味が形成される。

- (7) a. 世界とは無限に広がる空間であり、そこには様々の物がある。
[BCCWJ¹]
- b. 意識の奥底に秘められていた無限の創造と柔軟な力がとめどもなく生まれてくる。[BCCWJ]
- c. 僕は、縄文杉だけをとくに神格化したくない。縄文杉を育んできた森という無辺の環境が大切なんだ。[BCCWJ]
- d. 一穂は北海道という自身の生まれ立つ原郷を偏愛して、その地質学的叙情に多くの想像力をめぐらし、その原郷がもつ無窮の時空に多くの思索を費やした。[BCCWJ]
- e. コンピューターは専門家によってプログラムされるし、反復できるのです—おそらく人間よりはるかに速く急速に無際限の情報を与えるなどするのです。[BCCWJ]
- f. 白内障を患って視力が落ちていたことから、制作が思うように進まず、モネは契約にあった引き渡し期限を無期限にすることを要求している。[BCCWJ]

4.2 量的価値「多い」

「多い」という意味は、英語の「-less」と同じく、主に数量を表す語基や「計算する」という行為性を持つ語基において多く見られる。これには、「無数、無量、無算、無慮、無尽」などの語が該当する。辞書ではこれらの語が「数え

きれない、量りきれないほど多い」と定義されており、名詞性よりも動詞性に注目される。これらの語はほとんど古代中国語から借用されたものであり、「多い」という原義を継承していると考えられる。

- (8) a. 森には無数の切り株があるが、これは江戸時代に多量のヤクスギが伐採された跡であるという。[BCCWJ]
- b. 自分の内部には、無量の蛮性といったものがひそんで居る。その蛮性が時折破裂し、われながら愛想が尽きる。[BCCWJ]
- c. 彼女は美しすぎて、無算の男性たちからアプローチされている。
(*kanji.reader.com*)
- d. 無慮の群衆にとっては、何のかかわりもない、しかし怖るべき権威が、国王を斃した私に賦せられているにちがいがなかった。[BCCWJ]
- e. タイ国は無尽の外資導入による工業化で、もはや発展途上国とは言えないほどの急激な成長を遂げた。[BCCWJ]

4.3 質的価値「良い」

ポジティブな評価を示す「良い」という意味は、主に「対比できない、比較できない」という語基に基づいて確認される。代表的な例としては、「無類、無二、無双、無敵、無比、無上、無価」が挙げられる。「唯一無二」のように、特定の範囲において「最も優れている、一番である」という意味を示し、語基が表す「対敵」「対等するもの」の存在を否定することで、その優越性を強調する。

- (9) a. シェイクスピアにおける隠喩的「不透明性」にたいしてダンテにおける無類の「透明性」が、明晰な視覚形象としての意味を保っている。[BCCWJ]
- b. 稀有というよりはむしろ唯一無二の卓越した才能と、劇的効果への幸運な直観力とをもつ歌手である。[BCCWJ]

- c. ヘラクレスは素手でライオンに立ち向かい、その無双の腕力で三日三晩首を締めつけ、窒息死させた。[BCCWJ]
- d. 源頼光は、渡辺綱・坂田公時などの四人の無敵の部下を持つことで、最強の将軍となった。[BCCWJ]
- e. 日本の古写本は、世界的に見て、殆ど無比の価値高いものであります。[BCCWJ]
- f. 何んと生きることは素晴らしいことなのか、生きるとは無上の幸せになるためだった。[BCCWJ]
- g. 深い心の底には燃ゆる火もあり、沸く水もあり、清しい命の水もあり、燃せば力の黒金剛石の石炭もあり、無価の宝石も潜んで居ることを忘れてはならぬ。[徳富蘆花 1933 『みみずのたはこと』 七]

4.4 量的価値「少ない」と質的価値「良くない」

英語の「-less」と異なって、日本語の「無-」はポジティブな特殊な意味だけでなく、マイナスの評価を持つ特殊な意味も発生させる。量的価値「少ない」と質的価値「良くない」を表す語としては、「無礼、無学、無心、無知、無能」などがある。後ろの語基は人間が求める品行や人格を表すため、「無-」と結びつくことで、それらが「ない」よりも、むしろ「足りない」と解釈されるようになっているのである。

- (10) a. 礼も過ぐれば無礼になる。(ことわざ)
- b. 島の女たち、無学だったけど、よくものを知っていましたね。
[BCCWJ]
- c. 数万人が唄に合わせて無心に踊り、一体感と陶酔感に包まれる。
[BCCWJ]
- d. 反省すれば、私たちがどんなに無知であるかがわかってきます。
[BCCWJ]
- e. 無能な人ほど自分は有能だと思ったりします。あなたはがんば

~~~~~ればできると思いますよ。[BCCWJ]

(10) での「無」ではじまる語とその文脈を検討すると、語基が表す内容は、特定の場面では確かに「ない」と見なされるが、文全体では、特に破線部分を見ると、「完全がない」というわけではないことが分かる。ここで取り上げられた語は、「無」ではじまっても、意味的には「本当がない」よりも、「ある」が「普通よりも下」または「普通ほどではない」という状態を示し、マイナスの意味合いを持つ [角田 2009: 165-166]。そのため、「足りない」、「少ない」、そして「良くない」の意味を持つと理解できる。

## 5. 英語の「-less」と日本語の「無-」の特殊な意味の形成

### 5.1 否定理論からみる特殊な意味の形成

「-less」と「無-」は英語の「no」や「not」、日本語の「ない」に相当し、否定的接辞として、否定の本質を間接的に表す。Langacker [1991] は否定を認知過程と概念化に根ざすものとし、否定は存在の不在や非存在を強調するものとしている [Langacker 1991: 134]。否定は肯定的な状況との対比に基づき、心的空間内での存在と非存在の対立を明確にする。山梨 [2016] は、この Langacker [1991] の認知モデルを時間軸に沿ったプロセスとして位置付け、「不在」や「欠如」を否定の本質としている。

図4では、破線の四角は前概念である。そこでは、メンタルスペース内（楕

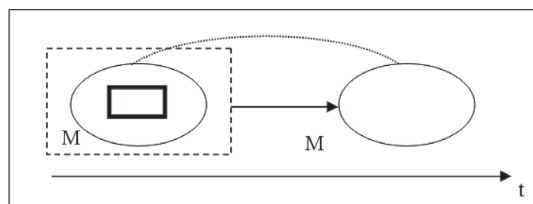


図4 否定の認知図式 [山梨 2016: 136]



円 M) の存在（モノや関係）がプロファイルされているが、右側にある同一のメンタルスペース（楕円）では、それが消えている。これが、無のプロファイル、つまり、予想されるモノや関係がないことのプロファイルの表示（否定辞の表すプロファイル）である。このように、「-less」と「無-」は「存在性の否定」を表しながらも、存在との対比によって非存在を強調する認知的な役割を持ち、全景で見ると、「絶対無」ではない。本稿で議論する特殊な意味は英語の「-less」であれ、日本語の「無-」であれ、この「存在」と「不在」の対比によって発生したと考えられる。このように、「-less」や「無-」の意味は、「存在」の概念を基盤として初めて成立する。これらの形態素が示す意味は、否定的な反対概念や欠如といった抽象的な概念だけでなく、認知的に処理される「存在」への反応として理解されるため、特殊な意味が形成される。

次に、特殊な意味が派生する際、否定はその条件を与える。否定は通常、肯定よりも形態論的に有標であるとされる [Horn 2001: 154-203]。認知的および言語的な側面から見ると、否定の形態素「-less」や「無-」は、形態論的に有標な要素として、語基に対して追加的で具体的な特徴を持ち、意味の追加情報を伝えることができる。語用論の観点から見ると、「-less」や「無-」などの有標な要素は認知的に処理が複雑であり、多くのリソースを必要とするため、より明確に意味を伝えることができる。このように、否定の形態素である「-less」や「無-」は、語基に付くことによって、認知的に「存在」に対する反対や欠如を示すだけでなく、その有標性により意味を追加し、否定辞と語基の意味の総和からさらに特殊な意味を派生させることができる。つまり、これらの形態素は単に「存在」の反対を示すのではなく、その反対の存在を間接的に喚起し、より深い意味を引き出す役割を果たす。言語変化の観点では、「-less」や「無-」などの有標な要素は、新しい意味変化の対象となることが多い。これは、有標な要素が明確に識別可能であり、認知的に理解しやすいためである。人間の認知は、特徴的で無標な要素に基づいて意味を構築するため、これらの要素が変化することで、意味そのものも変化する。このように、「-less」や「無-」が持つ有標性は、特殊な意味を形成するだけでなく、その形成や変化のプ

ロセスを理解するための有用な根拠を提供する。

最後に、否定的な接辞「-less」と「無-」が「多い」や「良い」といったポジティブな意味を形成できるかという問いがある。論理的に、二重否定 ( $\neg(\neg P)$ ) は肯定 (P) に等しいとされるが、実際には単なる否定の否定以上の効果が生じることがある [Horn 2001: 296-308]。日本語の「無害、無罪、無臭など」や、英語の *blameless*、*guiltless* などでは、論理的二重否定に従い、否定的な性質を否定することでプラスの意味が生じる。しかし、言語学における二重否定は、必ずしも肯定的な意味を生むわけではなく、強調を生むことがある。例えば、日本語の「無駄」(とても駄目だ)、「無茶」(めちゃくちゃだ)や、古英語の *unboundless* (限りない)、*unmatchless* (無比の)、*unnumberless* (数えきれない) などが挙げられる。これらの語では、余剰否定として複数の否定要素を使用することで否定が強調されている [Horn 2001: 280, Horn 2018: 718]。本稿では、「無-」や「-less」が積極的な意味を構成するためには、Horn [2001] が述べたように、二重否定による強調が重要な役割を果たすと考えられる。否定的接辞「無-」や「-less」が用いられることで、特定の意味が強調され、例えば *numberless* - 無数 (非常に多い) や *priceless* - 無価 (非常に価値がある) といった意味が付加されることがある。この用法は誇張法 (*Hyperbole*) の効果を生み、事象や特徴を極端に強調するため、「無-」や「-less」が用いられることによって、語の意味や評価が一層強調される。

以上の分析から、否定が特殊な意味を形成することができることが明らかとなった。次の節では、英語の「-less」と日本語の「無-」がそれぞれどのような特徴を持ち、特殊な意味を表現するのかについて具体的に説明する。

## 5.2 「-less」の意味のネットワークにおける特殊な意味

Holmqvist & Pluciennik [1996] が述べた通り、接尾辞「-less」の基本的な意味は、「欠けている」や「～がない」という否定的な意味を持ち、語基が示す「存在する状態 (FULL)」に対して、その状態が「欠けている状態 (EMPTY)」であることを示す。このように、「-less」は「存在」と「不在」の対立を表現

する手段となっている。そして、「-less」を語基に加えることによって、元の語が示していた肯定的または中立的な状態が否定され、欠如や不在の意味が強調される。例えば、hope（希望）に「-less」を付けると hopeless（希望がない）となり、hope にあった「存在する（希望がある）」という状態が「欠けた状態（希望がない）」に変わる。また、「-less」を付けることで、語基が持つ肯定的または中立的な意味から否定的な意味へと変化する。例えば、thought（考え）に「-less」を加えると thoughtless（無神経な）となり、「考える」という状態が「欠けた状態（考えない）」に変わる。このように、「-less」は語基の持つ意味を反転させる役割を果たす。さらに、「-less」は語基と比較して意味的に「逸脱」した状態を示すため、有標性を持つと言える。この特徴により、「-less」は単に否定的な意味を加えるだけでなく、元の語に新たな、特殊な意味を発生させるきっかけとなり、「-less」からなる語において特殊な意味を形成する上で重要な要因となる。

まずは、boundless、limitless、endless といった語は、直訳すると「境界が欠けている」、「限界がない」、「終わりががない」となる。この解釈は、次第に「限界が完全に存在しない」、「限界が設けられていない」という意味に変化した。言い換えると、「-less」は「欠けている」という基本的な意味から「ない」という意味へと発展し、さらにその意味が「極端である」、「限界を越えている」といった、より強調された意味「甚だしい」へと進化すると言える。なぜかという、私たちの認知において、「限界がない」という状態は、単に物理的な制約がないことを示すだけでなく、何かが非常に強烈である、または極端であるという印象を与える。その結果、boundless、limitless、endless といった表現が「甚だしい」という意味に結びつくかは、比喩的な理解に基づいていると考えられる。

そして、countless、numberless、measureless で確認されるような「多い」という意味は、boundless、limitless、endless の派生した「甚だしい」の意の継承によるものであると考えられる。以下の (11) では、語基が「限界・境界」の意味を表しながら、文全体の意味で「甚だしく多い」も意味している。

- (11) a. The tenants, in attending to the “body’s insistence on meaning”, organise their home community so that it is informed by mutual aid and boundless care. — Pia C. Kontos, 1999, *Ageing and Society*, 19, 677-689 (テナントたちは「身体の意味への執着」に注意を向け、相互援助と無限の配慮に基づいて彼らの地域コミュニティを組織している。)
- b. Molecular analysis of selected strains showed a highly diverse population suggestive of widespread dissemination of an almost limitless number of strains. — M. Shigematsu et al., 2000, *Epidemiol. Infect.*, 125, 523-530 (選択された株の分子解析は、非常に多様な集団を示し、ほぼ無限に近い数の株が広範に拡散していることを示唆した。)
- c. For many years he kept bees, supplying family and friends with a seemingly endless quantity of honey. — Richard Denny, 2016, *Times, Sunday Times* (彼は何年もの間、蜂を飼い、家族や友人に無限の蜂蜜を供給していた。)

Boundless、limitless、endless などの空間的限界を除外する語と結びつく場合、無限のものは通常の数値や限界を超えているという認識が生まれ、その結果として「多い」という意味が派生する。この「多い」が範囲と関係すると考えられるのは、物事を計算したり把握したりする際に、特定の範囲を事前に設定し、つまり境界を確定することが重要だからである。「-less」が付加されることによって、この「境界・限界」が永遠に否定されると同時に、その範囲内のものが「多い」または「非常に多い」という状況が生じる。つまり、countless、numberless、measureless などの語は、この派生的な意味を吸収し、結果として「甚だしく多い」という意味を持つようになる。把握できない対象の数値や程度は、人間が想定できる範囲を超える場合が多いため、「-less」の否定的な意味によって、その甚だしい多さが表現されるようになっている。

一方で、「良い」という意味に関しては、priceless という言葉の形成から検討できよう。priceless と worthless や valueless との相違は、語基の意味内

容と評価に関する相違点を誘発する背景概念が異なっている点にあると、有光 [2013b: 129] がすでに指摘している。しかし、有光 [2013b] の背景分析では、*price* の価値が「-less」と結びつくと「価値が消える」のではなく、むしろ「価値」が強調され、「非常に価値がある」という意味となる理由については明確に説明されていない。本稿では、*priceless* の意味が、良い意味を持つ *peerless* や *matchless* から影響されていると考える。*matchless* は「比類がない」、*peerless* は「同等の者がいない」を示し、特に (12) で示されるように、品質や能力において他と比べるものがない状態を表現する。

- (12) a. Elton John has had a *matchless* career writing highly individual songs for himself. —David Benedict, 2022, *Variety* (エルトン・ジョンは、自分自身のために非常に個性的な曲を作り上げるという比類のないキャリアを築いてきた。)
- b. Antarctica has a unique symbolism and history: of cooperation in the midst of conflict, of a *peerless* solution to territoriality, and of the highest adventure and enterprise. —Murray, C; Jabour, JA, 2004, *Independent expeditions and Antarctic tourism policy*, *Polar Record* 40 (04), 309-317 (南極大陸は、対立の中での協力、領土問題への比類なき解決策、そして最高の冒険と企業精神という、独自の象徴性と歴史を持っている。)
- c. Water is a *priceless* asset — we are only just beginning to realise just how *priceless* it is. As a resource, it will be in increasingly short supply over coming years and decades. —Mr. Cynog Dafis (*dabated on Wednesday 10 February 1999 at Commons Chamber*) *Provisions For Wales*, *Hansard Archive Vol 325* (水はかけがえのない資源であり、その貴重さがどれほどのものかを私たちは今まさに理解し始めたばかりです。資源として、今後数年、数十年の間にますます不足することになるでしょう。)

Peerless と matchless は、意味的に、「比較できないほど優れている」を示すように、どちらも卓越性や独自性を表現するため、対象に「良い」評価を追加することができる。その性質と評価は (12c) で確認できる。(12c) の priceless は「比べることができない重要な」という意味で、資源としての「水」の卓越性を強調する。また、(12c) の 2 つ目の priceless は「価値で対抗できるものがない」という意味で、「水」以外の比較対象が完全に存在しない状態を表すため比喩的に使用される。このように、「-less」は「対比できない」の意を継承し、誇張法で priceless が「良い」評価を持つようになっている。

「-less」に誇張法と積極的な意味が生じる現象は、speechless と breathless でも確認できる。以下の (13) では、speechless は「言えないほど驚くべき、実に素晴らしい」を、breathless は「興奮によるもので、高揚感がある」を意味している。

- (13) a. For once the trade seems almost unanimous in its approval, and this is so astonishing that it leaves one virtually speechless. —Mrs. Eirene White (debated on Monday 11 July 1960 at Commons Chamber) Cinematograph Films (Levy) Hansard archive Vol 626 (この取引は初めてほぼ満場一致で承認されたようですが、これは事実上言葉を失うほど驚くべきことである。)
- b. The unearthly purity and breathless singing tone of this instrument seemed uniquely to embody the possibility of an advanced alien voice. —Ken McLeod, 2003, *Space Oddities: Aliens, Futurism and Meaning in Popular Music*, *Popular Music*, 22 (3), 337-355 (この楽器の超自然的な純粋さと息を呑むような歌うような音色は、まるで高度な異星人の声の可能性を唯一無二で体現しているかのように感じられた。)

Speechless や breathless には直接的に「良い」という意味はないが、誇張的

に使われることで肯定的な評価を示すことがあり、誇張性を持つ *dead* と関連していると考えられる。有光 [2011] によれば、*dead* は物理的な完全性ととも、極端な程度を示す誇張法としても用いられる [有光 2011: 148]。例えば、「You're dead right !」、「You were dead lucky to get that job.」、「I'm dying to cook Kobe beef.」のように、*dead* は恐ろしい意味ではなく「完全に」や「非常に」を意味し、程度を強調する。*Speechless*（物言えなくなる）や *breathless*（息をしていない）は *dead* に影響され、「良い」意味を持つようになる。

### 5.3 「無-」の意味のネットワークにおける特殊な意味

英語の「-less」と異なって、日本語の「無-」はそれ自体で「～ない」の意を示す。(14) で示されるように、「無-」は「存在性の否定」を表しながらも、存在との対比によって非存在を強調する認知的な役割を持っている。

- (14) a. ブラックタイガーなどの場合、販売時には下処理の方法によって  
有頭エビと無頭エビに分けて表示されることが多い。  
 (→エビは必ず頭があるが、加工で取られた。)
- b. 糖분을加えていないものは無糖練乳と呼ばれるが、単に練乳と呼ぶ場合はこちらの加糖練乳を指すことが多い。  
 (→本来と異なって、砂糖を加えられていない。)
- c. 無血クーデターにより政権を掌握した。  
 (→クーデターのイメージと異なって、血を流さなかった。)

[チャン 2024: 47]

このように、「存在性の否定」を示す「無-」は、物体や概念が「～がない」という形で、「内側」(LM) と「外側」に分けられる認知的なフレームワーク、いわゆる IN・OUT スキーマの OUT で意味が獲得される。図 5 で示されるように、「無-」の認知的イメージ・スキーマは、語基が示す存在 (TR) が「認知面」(LM) から出ること示している。

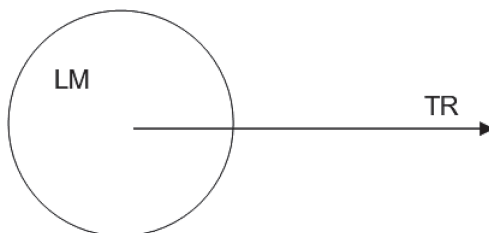


図5 IN・OUTスキーマのOUT [Johnson 1987: 33 & 他参照]<sup>2</sup>

IN・OUTスキーマに基づく「無-」は「有-」に対応し、基本的に「ある・ない」の関係を構築している。そのため、特殊な意味が発生する点については、「無-」とそれに対応する「有-」の反義関係を深く分析し、「無-」がどのようにしてその特殊な意味を表すことができるのかを再検討する必要がある。

- (15) a. 無塩 - 有塩、無頭 - 有頭、無害 - 有害、無人 - 有人、無機 - 有機など
- b. 無限 - 有限、無期 - 有期、無極 - 有極、無界 - 有界、無数 - 有数など
- c. 無能 - 有能、無名 - 有名、無識 - 有識、無用 - 有用、無力 - 有力など

(15a)において、語基が実世界の概念を示す場合、単に「有る・無い」の対比に基づく「無」では、特殊な意味を確認することはできない。しかし、(15b)において、空間、時間、数量の概念を表す際には、「無-」が「甚だしい」や「多い」の意味を表すことができる。つまり、「-less」と同様に、「無-」は否定的な意味を持ち、「限界・境界がない」状態を表すことができ、そのため「甚だしい」という程度の評価を示す意味を生むことができる。また、「無数」や「無量」といった表現では、この意味が引き継がれ、「甚だしく多い」という意味を示すことができる。しかし、英語の *boundless* - \* *boundful* や *numberless* - \* *numberful* には「-ful」に対応する反義語が存在しないのに対して、日本語の「無限 - 有限」や「無数 - 有数」には反義語のペアが存在し、この点において相違がある。「無数 - 有数」のペアに注目すると、「無数」は「非



常に多い」を示し、「有数」は「少ないが、良い」といった意味を持っている。「良い」を意味する「有数」は量的な価値ではなく、質的な価値に焦点を当てていると考えられる。そして、「有数」から「無」ではじまる語の「良い」意味の形成についても窺える。「無二、無類、無敵」といった語では、「無-」が、文脈において語基が示す対象の存在を否定すると同時に、言及される対象を限定する働きがある。例えば、「彼は私にとって無二の親友だ。」という文では、「私（話し手）」が「他の友達」を一時的に否定し、「彼」の存在を際立たせると同時に、「良い」評価を下すという意味が含まれる。このように、「無二」、「無類」、「無敵」は語義で「唯一」「むしろ稀である」という意味を持ち、質的価値として「良い」とされることになる。

一方、(15c) で示すように、「無-」は「全くない」とは限らず、「良くない」を示すことがある。これは、チャン [2023a] が指摘したように、「無-」が心的な属性や状態を示す語基に対して、期待に応えられないことを表現し、価値性の否定で「足りない」、「少ない」、「良くない」といった意味を発生する [チャン 2023a: 210]。次の (16) で示すように、「無-」と「有-」は、それ自体で直接的に相互に対応しない場合もある。ここでは、「無-」と「有-」が単に「ある・なし」の関係を示すのではなく、より複雑な状況を表すことが示唆されることが伺える。

- (16) a. 無欲 - \*有欲、無粹 - \*有粹、無我 - \*有我、無私 - \*有私、無垢 - \*有垢など  
 b. \*無権 - 有権、\*無史 - 有史、\*無利 - 有利、\*無志 - 有志、\*無望 - 有望など

ここでは、Hofmann [1993: 21] の有標性 (*Markedness*) という概念を用いて、(16) の「無-」と「有-」の非対称性を分析する。まず (16a) から見ると、語基は、常に「ある」状況を示すため、「有-」が付加される必要性はない。つまり、ここでの「無-」は、語基が示す「存在」の状況に反して、特別

な欠如や不在を示し、有標である。言い換えると、「無-」の使用は本質的に、実世界でも心的世界でも「いつも存在している状態」とは異なり、「不在・欠如」を語義に付加する。他方、(16b)の「有」の語基は、前提として「ない」ことから、特別な「ある」の状況を示すために「有-」が付加され、「存在性」を顕著に示す。例えば、「有権者（選挙権がない状態から、権利を有する者）」や「有給休暇（休んでも給与が支給される）」がその例である。更に、「有志、有望」のような語では、単に「ある」だけでなく、「十分にある」や「優れている」といった意味も表す。この場合、「有」は「良い」という評価を示す有標性を持つ。この特徴は、「無」と結びつく語基においても確認される。例えば、有名（名高い）、有識（学問や識見が広い）などでは、「有」の意味が単に「存在する」ととどまらず、質的に「良い」ことを強調している。したがって、(15c)で示したように、「無-」ではじまる語は、「少ない」や「良くない」といった意味を表すことになる。その結果、例えば「無才-多才、無学-博学、無視-重視」などの対立語において、「無-」は「完全でない」わけではなく、「少ない」、「足りない」、「良くない」といった状況を表すようになる。これにより、「無」と「有」を無標性・有標性の観点から分析することにより、「無」が「ない」から「少ない」、「良くない」を表す過程が明らかとなる。

#### 5.4 特殊な意味を形成する「-less」と「無-」の接点

これまで明らかにしたように、「-less」は、FULL・EMPTYスキーマに基づいて、ある属性が「満たされていない」状態を示す接辞である。つまり、「-less」は物理的な属性だけでなく、抽象的な概念にも適用され、FULL（満ちている）と対比することで、語基が示す属性がEMPTY（空）であることを表現できる。しかし、特定の属性がEMPTY（空）であることを利用して、「存在・不在/欠如」の対比を成し、そこからさらに有標性や誇張法といった特性や機能を帯びることになる。他方、IN・OUTスキーマを認知構造とする「無-」は、「存在性の否定」が機能しているが、語基の内容に基づいて多くの特殊な意味を生成することができる。IN・OUTスキーマの拡張により、「-less」に

比べて「無-」はより多様で複雑な意味を持ち得る。

しかし、英語の「-less」と日本語の「無-」には共通点が存在する。それは、両者が程度評価「甚だしい」、量的価値「多い」、質的価値「良い」といった特殊な意味を共に持つということである。言い換えれば英語の「-less」と日本語の「無-」はそもそもその基盤となる認知構造が異なるにもかかわらず、同様の特殊な意味を生み出すということである。この共通点は、両者のFULL・EMPTYスキーマやIN・OUTスキーマには収束しない。むしろ、別のスキーマで考察する必要があると言える。すなわち、これらの特殊な意味の形成過程を解明するためには、これまで注目されているCONTAINERイメージ・スキーマにおけるCONTENT（内容）とその移動ではなく、本研究で多く議論してきたBOUND（境界線）とその移動が重要な役割を果たしているのではないだろうか。実は、「-less」の意味と認知構造に関する議論において、Holmqvist & Pluciennik [1996] は、FULL・EMPTYスキーマに加えて、有界性（*Boundedness*）にも注目している。具体的には、「-less」が付く語句において、bloodless war や waterless ground では、「-less」が語基（blood, water）の後に来る名詞（war, ground）との関係で、その語基が境界を持つものとして捉えられ、存在が欠けた状態を示す。他方、endless や limitless の「-less」は、語基自体が「境界」や「限界」を意味し、無限を表現する。例えば、endless speech や timeless beauty では、語基のendやtimeが境界を持つものと見なされ、「-less」がその境界を取り除く働きをする。このように、有界性（*Boundedness*）と無界性（*Unboundedness*）について検討することは、「-less」と「無-」の特殊な意味の形成を理解する上で重要である。

有界性と無界性に関して、Talmy [1988] と Jackendoff [1991] は、人間の認識が物事を「有界性」と「無界性」に区別することから始まることを指摘している。Talmy [1988] によれば、数量が「無界性」として扱われる場合、それは無限に続くが、「有界性」の場合は限界があり個別の単位に区切られる [Talmy 1988: 178-180]。Talmy [1988] から考えると、「無界性」の場合、数量とは無限に続くものであり、明確な区切りや制限がないという特性を持つが、

「有界性」の場合、数量には明確な限界が設けられており、個別の単位に分けて考えることが可能である。このように、無界性と有界性の違いは、数量を持つ「限界の有無」と、それに基づく認知的な区別に関わっていると考えられる。一方で、Jackendoff [1991] は、無限の物質を二つに分けると、本質的に変わらないという考え方の点で、それぞれの部分が元の物質と同じ名前と呼べるとし、集まりや未完了のプロセスは無界性を表し、個体や完了したプロセスは有界性を表すと述べている [Jackendoff 1991: 19-20]。この考え方において、無限の物質とは本質的に「未完了」であり、その分割された部分が依然として同じ性質を保持しているため、個々の部分も元の全体と同じように扱うことができる。つまり、無界性はその物質やプロセスが途中で終わらず、継続して存在し続ける状態を示し、他方有界性はその物質やプロセスが一つの完了した状態を持つことを示すものである。これらを踏まえて、Holmqvist & Pluciennik [1996] は、時間や物質に境界線を引くことで生まれる、無界性を有界性に変換する方法を指摘している。例えば、時間を「年、月、日、時、分、秒」という単位に分け、水を「ガロン、リットル」といった単位で測定することで、無限のものに境界を設けることができる。また、Langacker [1987: 151] は、空間と時間が本質的に無限であると述べているが、認知においてはこれらにも境界が存在する。なぜなら、時間は昼夜や季節の変化によって、空間は山や川、国境などの物理的な境界線によって認識されるからである。つまり、物事を境界で区切ることは人間の基本的な認知操作であり、世界が「無限」ではなく、「有限」という認知を支える。その結果、世界を「有界性」として認識する人間は、「無界性」を「有界性」の否定として理解する。この理解は、「-less」と「無-」の特殊な意味形成と強く関連している。

有界性と無界性は固定的なものではなく、これらの転化によって生じるイメージ・スキーマが「-less」と「無-」のような否定的接辞による特殊な意味形成に重要な役割を果たす。本稿で指摘した特殊な意味は、「無-」と「-less」において、CONTAINER イメージ・スキーマと一部、構造が似ている CENTER・PERIPHERY (中心・周辺) と強く関連していると考えられる。な

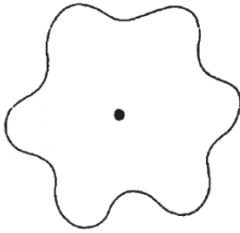


図6 CENTER · PERIPHERY  
スキーマ [Johnson 1987: 124]

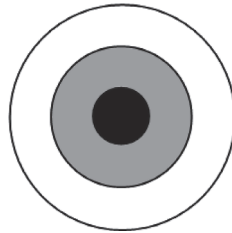


図7 遠近・中心・周辺  
[有光 2011: 29]

ぜかという、CENTER · PERIPHERY スキーマに基づいた境界線の移動が本研究で明らかにした特殊な意味を形成することができるからである。具体的に、CENTER · PERIPHERY スキーマは、境界線の移動に注目し、上述の有界性・無界性とその移動を直接的に表すだけでなく、物事の配置や関係性を理解するための認知的枠組みとしても機能するからである。図6で示すように、中心に位置するものは最も注目され、周辺のものには補足的な役割を果たす。これを踏まえ、有光 [2011] は、図7で示されるように、存在の有無が量や程度、否定的価値の動機づけとなり、空間認知に基づく非明示的な否定性が「中心＝肯定」「周辺＝否定」と解釈されることを説明している。

そして、CENTER と PERIPHERY の間の境界線の移動は、Johnson [1987] と有光 [2011] の指摘にも基づくと、「多い」という意味が限界や境界を示す語基に対して当該の範囲を無限に拡大し、その範囲に含まれる内容が「無数」と表現されることを示している。一方で、「良い」という意味は、対比や比較ができない語基に対して範囲が最小限に縮小し、その結果、内容の量が減少し、質的価値が高まる。それは、有界性は明確な境界を持つことを示し、無界性は境界がなく無限に広がる可能性があるからである。人間は有界性を通じて世界を認識し、無界性はその否定として理解される。無界性は「甚だしい」や「多い」といった量的価値に関連し、質的価値には不安や恐怖を伴うが、有界性は理解とコントロールを促進する安定した基盤を提供し、「良い」質的価値

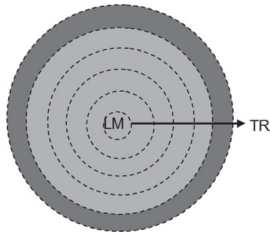


図8 特殊な意味「甚だしい」と「多い」の形成

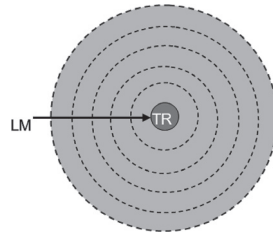


図9 特殊な意味「良い」の形成

を形成しやすくする。よって、「無-」や「-less」から形成される語の特殊な意味は、有界性と無界性の認知を正しく反映していると考えられる。このように、CONTAINER イメージ・スキーマで見る「無-」と「-less」の特殊な意味の形成は本質的に、境界線が CENTER から PERIPHERY への移動とその反対によって解釈されるのではないだろうか。

CENTER から PERIPHERY への移動は、特殊な意味「甚だしい」と「多い」の形成を私たちに提示する。図8に示すように、旧範囲が LM（限界）となり、新しい範囲が TR（転化後の範囲）として、旧範囲よりも広がる。範囲の拡大プロセスは無限に繰り返され、認知的には CENTER から PERIPHERY へと永遠に広がっていく。その結果、範囲は無限に拡大し、その範囲に含まれる内容の量が増えることで、「無数」と表現されるようになる。このように、「多い」という特殊な意味は、「甚だしい」と同じプロセスを通じて形成される二次的な意味である。この CENTER から PERIPHERY への移動は、「-less」と「無-」の意味分析で指摘された「限界・境界」の否定によって、比喩的に「甚だしい」そして「多い」へ発展することを反映している。

一方、範囲が PERIPHERY から CENTER へ移動する過程では、「良い」という意味が形成される。なぜ、「無比、無類、無双」や、英語の peerless、matchless といった語が境界線に関係しているのかという疑問を先に解決しなければならない。これらの語は、直接的に「境界・限界」を示さなくても、語

基が示す「比較する」という行為には、必ず特定の範囲が求められるからである。図9に示すように、意味形成のプロセスは同じCENTER・PERIPHERYのスキーマを採用している。しかし、「甚だしい」や「多い」といった特殊な意味が有界性を否定して外方向に拡大するのに対し、ここでのイメージ・スキーマは限定の方向へ向かう。具体的には、旧範囲(LM)が新しい範囲(TR)に向かって狭まり、TRはLMの中に位置する。この縮小の循環が連続的に行われることで、認知面はPERIPHERYからCENTERへと移動し、イメージ・スキーマが機能する。最終的に、範囲は無限に縮小し、その範囲に含まれるオブジェクトは「唯一」と表現されるようになる。本質的に、日本語の「無比、無類、無双」や、英語のpeerless、matchlessは、この境界線の移動に基づいた認知から分析すると、他を否定し、対象を限定することでその存在を際立たせる働きを持つことになる。その結果、量的価値としては「少ない、むしろ稀」である一方、質的価値としては常に「良い」とされる。

このように、これまでに特殊な意味を分析した結果、「甚だしい」「多い」と「良い」は一見すると独立して存在し、関係性がないように見える。しかし、実際にはCENTER・PERIPHERYスキーマに基づいて検討すると、いずれもBOUNDに関係する認知構造に基づいて形成されており、図8と図9から見ると、その方向が逆であることが明らかとなった。この分析により、「-less」と「無-」で確認された共通する特殊な意味は、本来の認知構造から派生したイメージ・スキーマが同じであり、認知のネットワークにおいて同じ方向で生じた結果であることが明らかとなった。

## 6. まとめ

本稿では、否定的な接辞を代表する英語の「-less」と日本語の「無-」による特殊な意味の形成についてCONTAINERイメージ・スキーマから考察した。その主な内容を次のようにまとめることができる。

まずは、本稿は英語の「-less」と日本語の「無-」が、程度評価「甚だしい」、

抽象的な価値「多い」、ポジティブな評価「良い」といった特殊な意味を持つ点で共通しており、その形成プロセスが同じであることを明らかにした。本稿では、これらの意味の形成が、人間の CONTAINER イメージ・スキーマに基づく認知によって起動することを示したが、内容に視点を置く IN・OUT スキーマや FULL・EMPTY スキーマではなく、境界線とその無界性および有界性を浮き彫りにする CENTER・PERIPHERY スキーマによって行われることを指摘した。このように、本稿は、CONTAINER イメージ・スキーマにおいて容器の範囲は常に一定ではなく、拡大したり縮小したりするように変動性があり、また境界線が必ずしも Landmark に限定されるのではなく、Trajector としても機能し得ることを示し、人間の認知の柔軟性を提起した。

次に、本稿は「無-」と「-less」における特殊な意味の形成において、両者に相違点もあることを明確にした。英語では、認知構造である FULL・EMPTY スキーマが派生した IN・OUT スキーマを媒介し、CENTER・PERIPHERY スキーマへと拡張される。一方で、日本語の「無-」は本来、IN・OUT スキーマから直接的に CENTER・PERIPHERY スキーマへと拡張し、「-less」と同様に「甚だしい」、「多い」、「良い」といった特殊な意味を形成する。さらに、「無-」は IN・OUT スキーマから FULL・EMPTY スキーマへと拡張されることもあり、これにより「-less」の原義である「欠けている」と同様の意味が獲得され、「少ない」「良くない」といった特殊な意味も形成される。つまり、「-less」と「無-」における「無い」と「少ない」の意味の獲得のプロセスには逆転が見られる。結果として、「-less」と「無-」は単に特殊な意味を共有するだけでなく、全体的な意味においても対応するということになる。

最後に、英語の「-less」と日本語の「無-」が特殊な意味を発生することは「存在」に関わる世界観を表すことを明らかにした。否定の基本概念は「存在」と「非存在」の対比によって構成され、その両方の対比こそが否定の表現である。「無-」と「-less」は、否定的な意味を間接的に表現するが、言語学的視点から見ると、これらの否定辞は「存在」を基盤としている必要があるという



ことである。「良い」や「多い」といった意味を表すように、「無-」や「-less」は単に否定的な意味を持つだけでなく、否定による強調を通じて、多義性、拡張性、豊富性といった特徴を示す。このように、相違点があるものの、英語の「-less」と日本語の「無-」は、単純な否定的意味から特殊かつ独特な意味を表現する点で共通しており、否定辞が持つ特殊な意味とそのユニークな使用法は、世界の言語に共通する特徴を持つのではないかと考えられる。

[注]

- 1 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からの例を示す。
- 2 Johnson [1987: 32-33] では OUT-1 と表記され、Lindner, Susan "A Lexico-Semantic Analysis of Verb Particle Constructions with UP and OUT" (Ph. D. dissertation., University of California, San Diego, 1981) から参考したと述べられている [Johnson 1987: 32, 218]。

[参考文献]

(日本語)

有光奈美

- 2011 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム：認知言語学と語用論の接点』 開拓社、東京。
- 2013a 『『無』と『空』の関連表現と広告表現における“*fill the void*”の位置付け：John Cage『4分33秒』の世界観との接点』『経営論集』(81), 161-177。
- 2013b 「価値があるとはどのようなことか：Value, price, costに関する価値評価の認知と接辞による意味反転の動機づけ」『経営論集』(82), 125-135。

影山太郎

- 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房、東京。
- 1999 『形態論と意味』 くろしお出版、東京。

西川盛雄

- 2006 『英語接辞研究』 開拓社、東京。
- 2013 『英語接辞の魅力：語彙力を高める単語のメカニズム』 開拓社、東京。

チャンクォック ヒエップ

- 2023a 「日本語における『無』ではじまる二字漢語の意味についての研究：『無』と結合する語基の意味を中心に」『*Kỷ yếu Hội thảo quốc tế lần thứ 4 Khoa tiếng Nhật Trường Đại học Hà Nội: Nghiên cứu - Giảng dạy Ngôn ngữ Nhật và Nhật Bản học: Xu hướng thế giới và thực tiễn tại Việt Nam* (ハノイ大学日本語学部第4回国際シンポジウム紀要：日本語教育と日本研究～世界の潮流とベトナムの実

践)』, 200-218。

2023b 「日本語における『無』の意味についての再考: 『無』ではじまる二字漢語とその反義関係に基づいて」『日本語・日本文化研究』(33), 84-98。

2024 「日本語における『無』ではじまる語の特殊な意味についての研究」『日本語学会 2024 年度秋大会予稿集』, 43-48。

角田太作

2009 『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』くろしお出版, 東京。

山梨正明

2016 『自然論理と日常言語』ひつじ書房, 東京。

2019 『日・英語の発想と論理: 認知モードの対象分析』開拓者, 東京。

渡邊敏郎・E.Skrzypczak・P.Snowden

2003 (編集)『新和英大辞典第5版』研究社, 東京。

(英語)

Hofmann, Thomas R.

1993 *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics (Learning About Language)*, Longman, New York.

Horn, Laurence R.

2001 *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press, Chicago. (河上誓作 (監訳) (2018)『否定の博物誌』(言語学翻訳叢書 13)、ひつじ書房。)

Jackendoff, R.

1991 "Parts and boundaries". in B.Levin and S. Pinker (ed.) *Cognition*, 41 (1-3), Blackwell, Cambridge MA & Oxford UK, 9-45.

Johnson, Mark.

1987 *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. The University of Chicago Press, Chicago and London.

Kenneth Holmqvist, Jarosław Pluciennik

1996 "Conceptualized deviations from expected normality: A semantic comparison between lexical term items ending in -FUL and -LESS". in Åke Viberg (ed.) *Nordic Journal of Linguistics*, 19, Cambridge University Press, Cambridge, 3-33.

Langacker, Ronald W.

1987 *Foundations of Cognitive Grammar Vol.1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.

1991 *Foundations of Cognitive Grammar Vol.2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.

Takahashi Morio

1952 *Takahashi's Pocket Romanized English-Japanese Dictionary*, 大盛堂書房.

Talmy, Leonard

- 1988 "The Relation of Grammar to Cognition". in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam, 165-205.

Zimmer, Karl Ernst

- 1964 "Affixal Negation in Some Non-Indo-European Languages", in *WORD*, 20:supl, Monograph No. 5, Routledge, London, 67-78.

## A Study on the Formation of Special Meanings through Negative Affixes:

Focusing on the English suffix “-less” and the Japanese prefix “無 -” from the Perspective of the CONTAINER Image Schema

Quoc Hiep TRAN

The concept of “special meaning” refers to the phenomenon where the meaning of a compound word exceeds the simple sum of its components. Instead, the fusion of these elements generates a distinct, new meaning. This study, adopting a cognitive semantics approach and the *CONTAINER* image schema, examines how the Japanese prefix “無 -” and the English suffix “-less” form special meanings.

First, the paper demonstrates that both the English suffix “-less” and the Japanese prefix “無 -” share similar special meanings, including degree evaluation “EXTREME”, abstract value “MANY”, and positive evaluation “GOOD”. For example, words like “boundless”, “limitless”, “timeless”, and “endless” express the concept of degree evaluation, while terms like “無限” (*mugen*), “無辺” (*muhen*) convey similar meanings in Japanese. Words such as “numberless”, “countless”, “measureless”, and their Japanese counterparts “無数” (*musū*), “無量” (*muryō*), and “無尽” (*mujin*) convey abstract values. Additionally, terms like “peerless”, “matchless”, and their Japanese equivalents “無敵” (*muteki*), “無双” (*musō*), “無類” (*murui*) and “無二” (*muni*) denote positive evaluation. The paper argues that the cognitive process behind the formation of these meanings is the same for both prefixes, driven by the *CONTAINER* image schema. However, while content-related schemas such as *IN-OUT* or *FULL-EMPTY* are important, the formation of these

meanings is largely shaped by the *CENTER-PERIPHERY* schema, which highlights the dynamic nature of boundaries, whether bounded or unbounded. This shows that the *CONTAINER* schema is flexible, with boundaries that can expand or contract, and can function as both *Landmark* and *Trajector*, underscoring the adaptability of human cognition.

Second, the paper clarifies that there are differences in the special meanings formed by “無-” and “-less.” In English, the *FULL-EMPTY* schema derived from the *IN-OUT* schema extends into the *CENTER-PERIPHERY* schema. In contrast, “無-” in Japanese extends directly from the *IN-OUT* schema to the *CENTER-PERIPHERY* schema, forming similar meanings such as “EXTREME”, “MANY”, and “GOOD”. Additionally, “無-” can also extend from *IN-OUT* to *FULL-EMPTY*, acquiring meanings similar to the original sense of “-less,” such as “missing” or “lacking”, and forming meanings like “FEW” or “BAD” (e.g., “無礼” (*burei*) meaning “rudeness”, “無学” (*mugaku*) meaning “ignorance”, and “無能” (*munō*) meaning “incompetence”). Therefore, the meanings of “absence” and “few” appear in reverse order between “-less” and “無-”. While the two prefixes share similar special meanings, they also diverge in their overall meaning structures.

Third, the study explores how these special meanings reflect a worldview centered on “Existence”. Both “無-” and “-less” express negation indirectly. However, these negative prefixes are grounded in the concept of “Existence”, and through negation, they emphasize polysemy, expansiveness, and richness. Despite differences in linguistic and cultural backgrounds, both “-less” and “無-” share a common feature: they derive special meanings from *Negation*. This analysis demonstrates how negative prefixes across languages can create unique meanings that reflect both shared and divergent cognitive and cultural perspectives on existence.